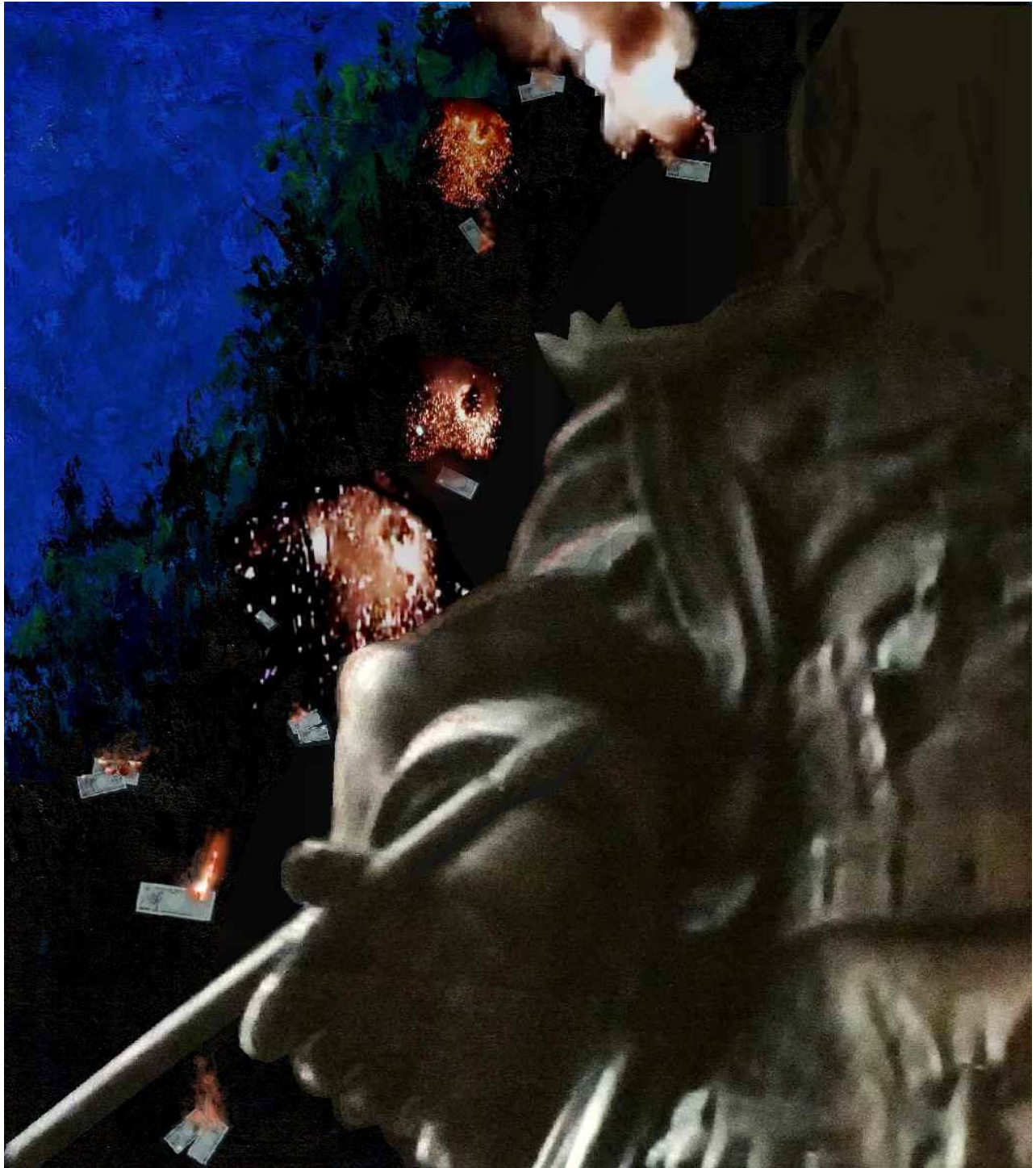


月刊
JMITU

アノコノカ

新型コロナ対応版



7月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ グループ分会 2022年発行

No.451

成果主義賃金は会社を良くするのか？
足の引つ張り合いでは会社にとってマイナス

賃上げ促進税制で

法人税減額

賃金を上げるとその増額率などに応じて法人税の控除が増えるという制度で、この制度自体は以前からありました。

話題になったのは、今年の4月からはその控除額が中小企業で最大40%まで増えるようになり、前年度からの継続雇用という要件が外され、会社全体で支払った給与やボーナスの総額の増加率で判断されることになりました。新たに採用した従業員の賃金も含めてもよいこととなったので、たとえ従業員個々の賃金額が低下していたとして

成果主義賃金で

職場はよくなったか？

過去の組合アンケートでも

・実際は人が評価するのでなかなか公平な評価がなされないから不満がたまる。職場での助け合いの精神がなくなるどころか、足の引つ張り合いが始まり雰囲気が悪くなる。

・営業成績等わかりやすい物差しならいいが、物差しのない仕事だと評価するのが難しい、業務のわかっていない上司に評価されるので、目標面談や目標設定の書き方がうまくい人が評価されてしまい、実際の業務の成果を評価してくれない。

・評価を得られるような結果が出せている時は良いですが、

一度上手く成果が上げられなくなった瞬間、そこからモチベーションを上げていくのは至難の業で、いくら努力していても要領の悪い人は、評価されないままの期間が長く続けば続くほど精神的に疲弊してしまいます。

一時期は特に若手の人々が成果主義を支持していましたが、その若手たちも数年経ち、給料が上がらない現実を知り、最近はそうでもなくなりまして。成果主義を取り入れたら業績が傾いた会社も少なくありません。

成果主義は誰もが頑張れば上がる制度ではなく、限られた人たちは上がっていきますが、その他の人たちは給料が資格の上限に行き上がらなくなるという現実です。

掌編小説

紙でできている本

仙洞田一彦

百人くらいは入れそうな食

堂の片隅で、文庫本を読んでいる青年がいた。私は六人掛けの同じテーブルで、昼食後の茶を飲んでいた。周りの人達が立って出て行ったので、その青年に気づいた。食堂のある建物には、いくつもの会社の倉庫が間借りするような形で入っていた。そこで働いている人なら、誰でも利用できる食堂だった。飲み物を注文すれば、会議や面談にも利用できた。私も定年後、そこに入っている会社のひとつでパートとして働いていた。

午後一時が近いせいとか、食堂は人が少なくなっていた。

昼休みに読書する青年を見て、四十年くらい前の私を見かけた思いがした。

「お兄さん、読書なんて珍しいですね」

私は読書の邪魔になると思いなながらも、つい声を掛けてしまった。いまは老いも若きもスマホだ。歩きながらもスマホを見ている。いつの頃から電車では漫画週刊誌を読む人が多かった時代もあった。

青年は本から目を離し、私の方を見た。

「珍しいですか。そうかもしれませんね」

読書を中断させられたからか、不機嫌さが言い方に出ていたような気がした。

「すみません。ごめんなさい」

私はすぐに謝った。珍しいでなく、読書なんて素晴らし

いと言えよよかったか。言葉の選択を誤ったかなとも思った。視線を青年から反らし、前を向いた。そうだよな、どこの年寄りか分からない者から、読書を中断されれば、四十年前の当時の私だって不機嫌になるに違いない。しかも限られた時間の昼休みだ。邪魔されたくない。出勤の電車の中で読み、昼休みにも、そして帰りの電車の中でも、ページでも余計に読み進めたものだ。

「ごめん、ごめん」

私は呟いた。それがまた耳に入ったらしく、青年が言った。

「えっ、なんですか」

「え、いや。いえ、私も読書が何よりの楽しみ。恥ずかしい話ですけど、うちはごみ屋敷。

本であふれかえっていて、床が抜けそうです。あなたの姿を拝見して、私の若い頃を思い出して、つい声を掛けてしまいました」

青年は本を閉じて、テーブルの上に置いた。それから私に言った。

「どんな本を読まれていたんですか」

「松本清張とか、ああいった……」

「ああ、そういうのですか。昔の人ですよ」

青年は私の言葉が終わらないうちに言った。私の思い過ぎしか、軽い軽蔑の響きが込められているように聞こえた。松本清張は社会派と言われるが、社会派「推理小説」で、どちらかというと娯楽小説に入るのだろうか。今の言葉では

エンタメというんだらうか。

サルトルとかカミュという哲学的雰囲気の作家の名前を挙げるべきだったか、と少し後悔した。でも、青年のその娯楽小説を馬鹿にする生意気さ加減がいい。周りの人達がななんて言っていたか分からないが、当時の私も先輩たちから見れば相当生意気だったんじゃないかな。

食堂の時計が一時を打った。私は立ち上がり空いた食器を載せた盆をもって、使用済み食器置場の方に歩いて行った。青年の食器はすでに片付けられていたらしくそのまま出て行こうとした。本はテーブルに置かれたままだ。

私は盆を持ったまま声をかけた。

「お兄さん、本、忘れてる」

青年が振り向いて言った。

「前からそこに置いてあったんです。珍しかったから見えていたんです。紙の本を読む人なんて、今時いないでしょう」
言いおいて青年は食堂から姿を消した。